

「課題研究」におけるITを活用した異校種間連携

宮城県鹿島台商業高等学校 教諭 葛 西 利 樹
katotti@kasimadai-ch.myswan.ne.jp

宮城県鹿島台商業高等学校 教諭 熊 谷 恭
kyo.kuma@kasimadai-ch.myswan.ne.jp

宮城県南郷高等学校 教諭 川 口 友 和
kawaguchi@nango-h.myswan.ne.jp

1. はじめに

経済社会の著しい変化によって、近年、高校間連携・中高連携・高大連携といわれるように、それぞれの学校の専門性・特色、施設設備を生かした交流学习が全国的に広がりを見せている。その多くが、相互に教師を派遣して交流し、授業を行ったり、また、生徒が相互に学校を訪問し、興味・関心に応じて他校で授業を受講したりする形態である。そのねらいは、経済社会に対応し、生徒の多様な学習ニーズに応えることにより学習意欲を高め、自校では学ぶことができない、もしくは開講されていない教科・科目の学習を通して、自らの学習の深化・統合を図ることである。加えて、生徒の勤労観やのぞましい職業観の育成にも寄与することが考えられる。

以上のことを踏まえ、専門高校では、「総合的な学習の時間」の代替科目として「課題研究」を設置している学校が多く、各校の実情に合わせた取り組みがなされている。その中で、教育用ネットワークシステムである「宮城県学習情報ネットワーク」、「みやぎ SWAN」という）の効果的な活用を考え、そのコンテンツの一つである「テレビ会議システム」の利用が広がりつつある。商業高校と農業高校の継続的な異校種間交流学习を計画・実践し、地域で様々な活動を行い、お互いの専門性を生かし、ITを活用することによって、知識・技術の融合を目指している。

2. 主題設定の理由

専門教科の授業では、実験・実習等を通じた実際の・体験的な授業を行い、知識・理解、技能・表現の育成が図られ、成就感や満足感を実感させることが可能と考える。これらは、生徒の勤労観やのぞましい職業観を確立することに役立つと思われる。そして、自らを律し、異校種の協力を通して他と協調し、他と生きるといった豊かな人間性を培うことを一つの目標としている。また、自ら課題を発見し、同時に様々な問題や課題が発生した時に、それらを解決するために工夫し、困難を克服しようとする問題解決能力や創造性を育て、専門的な内容の基礎的・基本的な知識や技術の習得を図ることをもう一つの目標とする。

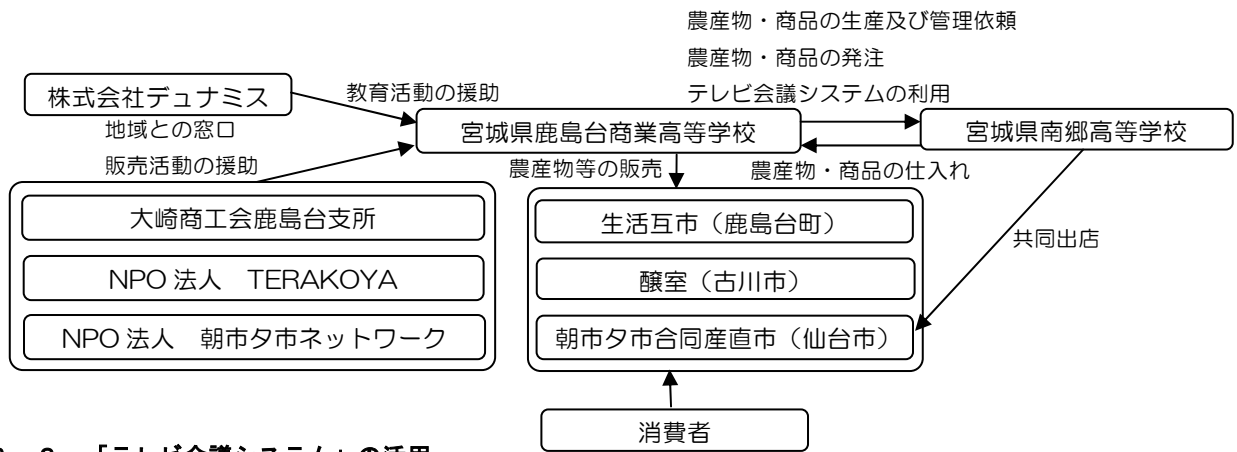
3. 異校種間連携の実施までの経緯

3.1 本校の異校種間連携について

産業教育を学ぶ生徒に対して学習の動機付けを与えるため、実体験を伴う活動に取り組み、学習意欲を高めたり、理解力の向上や発展的学習を実現することを考えた。

本地区には、「商業」・「農業」・「工業」といった地域に根ざした産業教育を実践している学校があり、今後、地域社会を発展させるためには、異校種の高校が連携し、それぞれの高校で学ぶ生徒たちに商業と農業の共通性、重要性を理解させることが必要であると考えた。このことは、相互の専門教科・科目の共有及び発展にもつながる上で大きな期待ができる。そこで、両校の「課題研究」でのねらいを十分踏まえた上で、平成16年度より商業高校・農業高校の異校種間連携による交流学习を導入し、販売活動や「テレビ会議システム」を使った授業を実施している。





3. 2 「テレビ会議システム」の活用

本取り組みでは、「テレビ会議システム」を活用した学習を提唱し、「課題研究」で実施することを試みた。「テレビ会議システム」の導入は、平成15年度「ビジネス基礎」の授業で試み、その後、平成16年度「課題研究」において実施している。それぞれの場所に居ながらも、頻りに情報交換ができる「テレビ会議システム」は非常に画期的であった。「テレビ会議システム」内の機能を取り入れて、南郷高校からは、旬の草花・野菜の生育状況を入手し、鹿島台商業高校からは、今まで行なってきた生活互市及び鹿商祭の販売報告書を検討し合い、売り上げが良い商品、悪い商品の確認や、商品仕入の注文などを行った。

このシステムにより、教師側は情報活用能力を高めるIT教育の推進を心がけることができ、一方、生徒側も自主的な活動に拍車がかかり、その結果、学校間連携の意識がよりいっそう深まった。さらに、「つくる」農業高校と「売る」商業高校の連携により、農業高校生は、“土に向かうことから人に向かうこと”へ。そして、商業高校生は、“人に向かうことから土に向かうこと”を考えさせ、これからの「ビジネス」への計り知れない可能性を生み出した。

4. 今後の展望と課題

- ① 互いの授業の時間帯が合わないため、販売活動・「テレビ会議システム」の利用に関しては、主に放課後に実施する。そのため、部活動やその他の事情により、全員参加での実施は困難なので一部の生徒で取り組むことにした。
- ② 今後は、授業を通して、ビジネスに関する新しい発見（気づき）や新しいことに挑戦する意思、起業家精神を培うことを目標としたい。
- ③ 専門教科の学習においては、生徒一人ひとりが自ら興味・関心・意欲をもって主体的に学習に取り組み、それぞれの個性を育て伸ばしていくことが重視されているが、積極的に参加する生徒がいる一方、消極的な生徒もいたため、その生徒に対する指導を工夫していきたい。今後、これらの課題解決を目指して授業の改善に取り組んでいきたいと考えている。

5. おわりにーまとめにかえて

商業高校においては、普段、販売者としての立場のみを学習しているが、農業高校のような生産者の立場を学習する生徒たちと交流することにより、生産者の立場を知り、より良い販売者となるのが可能なのではないかと考えた。これは生産者と販売者の立場の相互理解を図ることで、より良い商品（製品）を社会に流通させることにもつながるのではないだろうか。交流学習を一層効果的に進める情報伝達の方法として「テレビ会議システム」は非常に有効である。互いに別の場所にいながら、相手の顔を見ながらリアルタイムに情報を交換し合うことができるのである。本校では数回の利用でまだまだ課題はあるものの、生徒たちの反応もまずまずのものであった。ただし、こういった機器を充分に活用するためには「IT活用する能力」が、今後ますます問われてくることは容易に推察できる。今回の交流学習を通して、他校と連携を図り、互いを知ることによって互いの視野を広げることにもなり、最小単位である社会を構成する一員としての自覚を持つことができるのではないかとと思われる。同時に豊かな人間性を育てるという意味からも、交流学習の場は必要であり、今後専門高校に関わらず、他教科においても必要性が増していくように思う。

異校種間連携の取り組みは、まだ、始まったばかりである。今後、様々な課題が生じるとは思うが、諸先生方からご意見ご指導をいただき、さらなる活動の発展を考えていきたい。そして、これからも生徒と共に学び続け、新たな取り組みに挑戦していきたいと思っている。